

渡邊英夫・平山史朗・藤崎拓憲(著)

脳卒中の下肢装具 第3版

病態に対応した装具の選択法

評者 長倉裕二

熊本保健科学大学保健科学部リハビリテーション学科

『脳卒中治療ガイドライン 2015』の歩行障害のリハビリテーションにおいて、「内反尖足がある患者に対して歩行の改善のために短下肢装具を用いることが勧められる(グレードB)」として推奨されている。また、「歩行や歩行に関連する下肢訓練の量を多くすることは、歩行能力の改善のために強く勧められる(グレードA)」という推奨もあり、脳卒中のリハビリテーションにおいて歩行練習は不可欠なものとなっている。さらに、日本理学療法士学会から出版されている『理学療法診療ガイドライン 2011』において装具療法は推奨グレードA/エビデンスレベル2とされ、FIM 得点の向上、歩行速度の向上やエネルギー消費の減少、転倒予防に効果があるとされている。いずれも推奨グレードが高いことから、脳卒中片麻痺の歩行再建やリハビリテーションのなかで装具療法は大きな位置づけとなっていることがわかる。

しかし装具療法の担い手となる理学療法士の卒前教育のなかで、装具療法に関する内容は教科書をみる限り、昔から使用されている両側支柱型のダブルクレンザックタイプや後方支柱型靴べら式短下肢装具などがいまだ代表格として掲載され、比較的わかりやすく解説されているものの、新しい材料や部品など日々開発されている装具に関しては、臨床場面で試してみないとわからないというのが現状である。そしてこれらの情報が不十分なために、新しい装具作製に躊躇することもしばしばである。

本書『脳卒中の下肢装具』はこれらの問題に対し、初版から第2版へと具体的な個々の装具を挙げ、その適応や機能、特徴などをわかりやすく解説してきた。今回の第3版は、これに加えさらに臨床に沿った内容となっている。そして今回、2名の理学療法士が著者となっていることにより、理学療法介入へより具体的な方法が提示され、装具選択の一助にな

ることが期待される。

第2版から変わったところでわかりやすいのはオールカラーになったことであり、これによって装具そのものがイメージしやすくなった。この分野においては言葉で装具を表現されるよりも画像そのものをみたほうがよりわかりやすく、臨床場面では片麻痺患者に写真を提示できることによって、装具装着のイメージや生活の場面でのイメージも付きやすくなると考える。また新しく開発され、臨床での利用価値の高い装具も多く紹介されている。このように日々変わっていく装具材料や部品、機能などを新しくしていくことで多様化する片麻痺患者のニーズにも応えられるものだと考える。

そして今回、理学療法士に対するアンケート調査をもとにしたQ & Aである第24章「脳卒中歩行訓練と装具の選定・適応に関する理学療法士の質問」はガイドラインなどで用いられるクリニカルケースに対応するもので、特に臨床における問題に対する具体的な対応策や考え方などを知ることができる。理学療法介入場面では、患者への装具作製の装着による利点や問題点を説明する道具として、装具装着時に起こるさまざまな問題に対する解決の糸口となるであろう。

初版ではCDを添付することも検討されていたようであるが、できれば装着時の画像に加えて動画などで説明が加わるとさらに利用価値が高まるものと考え、今後に期待したい。

A5判・208頁・4色刷
定価：本体4,200円＋税
医学書院刊、2016年